



TITLE:

大学の教育活動の質をどう把握・評価するか

AUTHOR(S):

梶田, 勲一

CITATION:

梶田, 勲一. 大学の教育活動の質をどう把握・評価するか. 京都大学高等教育研究 1995, 1: 39-40

ISSUE DATE:

1995-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/53461>

RIGHT:

大学の教育活動の質をどう把握・評価するか

梶 田 勲 一（高等教育教授システム開発センター）

大学における教育活動を質的に高めていくためには、現実の大学教育のあり方の質的水準を把握・検討し、それに基づいて今後の改善・改革の課題を明確にしていく、という取り組みが不可欠である。

しかしながら、具体的な教育活動の質的水準を評価するための視点・基準としては極めて多様なものが考えられる。大学の教育活動がどの程度の水準にあるかを判定するためには、基底要因の検討から活動自体の検討、更には教育効果の検討に至るまで、さまざまな視点・基準があり得るのである。

例えば、教育活動を支える最も基底的な施設・設備的な基準としては、従来、次のようなものが考えられてきた。これらはいずれも、各大学の帳簿上の資料を検討すれば算出されるものである。

- (1) 教員一人当たりの学生数
- (2) 学生一人当たりの図書冊数
- (3) 学生一人当たりの校舎・校地面積

もう少し進んで、学生自身の学習意欲がどうか、という視点からの検討の行うためには、例えば次のようなものが考えられるであろう。これらはいずれも何らかの実態調査をおこなってやる必要がある。

- (4) 学生一人当たりの図書貸し出し数 [⇐図書館記録]
- (5) 学生一人当たりの講義・演習等の出席率（欠席率） [⇐出席記録]
- (6) 講義・演習等の最中における学生の非学習的行動（私語・居眠り等）生起率 [⇐ビデオ記録]

そして、実際の教育活動そのものの質を直接的な形で問うものとしては、例えば次のようなものが考えられる。これらは、学生側と教員側の双方から資料が得られることが望ましいであろうし、また、そうした資料は学生・教員の外的視点（ビデオ映像等）からと内的視点（内省報告等）からの双方のものであることが望ましいであろう。

- (7) 講義・演習等に対する学生の集中度 [⇐ビデオ記録]
- (8) 教員の熱意と学生への目配り等 [⇐ビデオ記録]
- (9) 学生の質問の数と教員の回答の丁寧さ・適切さ [⇐ビデオ記録]
- (10) 講義・演習等に対する学生の満足度 [⇐事後のコメント・評定]
- (11) 講義・演習等の内容に対する学生の理解度 [⇐事後のコメント・小テスト]
- (12) 講義・演習等の直後における担当教員の反省 [⇐コメント・評定]

さらには、こうした直接的な検討を乗り越えたもの、すなわち講義・演習等の積み重ねによる効果等を見るような検討が必要とされる。例えば、これは次のようなものとなるであろう。

- (13) 講義・演習等の初回と最終回の間での考えや理解等の変容 [⇐初回と最終回のコメント等の比較検討]
- (14) 講義・演習等の最終回における学生の振り返り [⇐最終回での感想文・評定]
- (15) 講義・演習等の最終回を終えた時点での担当教員の振り返り [⇐反省文・評定]

そして最終的には、教育活動の効果は、時間を経た後にそれがどのような形で役立っているか、という視点から検討されなくてはならない。これには例えば、次のようなものが含まれるであろう。

- (16) 卒業の時点における学生の振り返り [⇐感想文・評定]
- (17) 卒業の時点における教員の振り返り [⇐感想文・評定]
- (18) 卒業後の学生の進路 [⇐就職先等の調査]
- (19) 卒業して年月がたった後の元学生の振り返り [⇐卒業生調査]
- (20) 卒業して年月がたった後の元学生の活躍状況（社会的地位等を含む） [⇐卒業生調査]

大学における教育活動の質を問題にしようとする場合、ここに見てきたように実に多様な視点から、しかも多層的に検討を行わなければならないのである。当然のことながら、そうした検討を通じて、表層的な面での「良い教育」が、長い目で見ると結局は必ずしも「良い教育」とは言えない、といった結果になる場合もあるはずである。したがって、一部の人の主張に見られるように、講義・演習等に対する学生の満足度（直接的な形としては項目10、時には項目14あるいは項目16を含む場合も）だけから大学教育の質を考えていこうという単純極まりない発想（アメリカの大学ではそうだからとか、大学でも基本的に「顧客サービス」を考えるべきだから、といった理由付けがつくことが多いが）は、このように考えてくると非常に短絡的な結論に導かれかねないといった危険性を持つ、と言わねばならないであろう。

調査対象	(客観的) 事実確認	ビデオ記録等	振り返り
学 生	4・5	6・7・9	10・11・13・14・16
教 員		8・9	12・15・17
卒 業 生	18・20		19
大学自体	1・2・3		

われわれはケーススタディ的な資料として、京都大学や大阪大学での「教育心理学」関係の講義や演習、大学院の演習について、学生が記述した毎回の事後コメントを数年間分持っている。こうしたコメントにはその講義あるいは演習で得られたものが率直に記述されていることが多い。学生による数値的な評価よりも、講義や演習等の改善に役立つ情報がずっと多く含まれている。内容の断片を参考のために紹介すると、例えば次のようなものである。

「今日の講義では、実感することがいかに重要であるかについて痛感させられた。それとともに、自分がいかに机の上だけの勉強のみを行い、実感を欠いた知識の蓄積だけをやっていたかを思い知らされた」（京大3回生）

「論理をうまく組み立てられない自分の愚かさを認めさせられた今日の授業だった」（阪大3回生）

「丁寧なお話で、難しいけれど今の自分について考えさせられることが多かったです」（京大4回生）

こうした1年間にわたってのコメントの一部は、これまでも分析が試みられ発表されてはいる（文献2・3）が、これをここで見てきたような教育活動の質的水準を吟味するといった見地から検討していくことも考えられないではないであろう。

大学における教育の質の評価は、まだその試みが緒についたばかりである。拙速を戒めつつ、また単純極まりない単眼思考に陥ることを自戒しつつ、着実な形で試みを積み上げていきたいものである。

【文献】

- (1) 梶田勲一『教育評価』有斐閣, 1993年。
- (2) 黒田雅美・山田倫代「大学における授業評価の試み——演習コメントの内容分析から」大阪大学教育心理学年報1, 1992年, 109～115.
- (3) 山本恵子「大学の演習時間の意識に関する研究(Ⅲ)」日本人間性心理学会第13回大会発表論文集, 1994年, 56～57.